

令和 6 年度 認知症に関する課題と取り組みについて

1、思いやりケア会議（個人ケース）から見えてきた認知症に関する主な課題と対応方法

（１）印西北部地域包括支援センター（以下、「北部」。）

①課 題：本人の病識が乏しく、金銭管理できないが第三者による金銭管理を拒む。料金滞納して電気などが止められてしまう。

対応方法：電気・ガス・水道料金の復旧支援を目的に、いんざいワークライフサポートに家計相談として介入してもらっている。

②課 題：匿名希望で地域住民などから、言動が心配な高齢者がいるため、安否確認してほしいといった連絡が入るケースの対応。

対応方法：民生委員等と連携を図り、日ごろの言動に心配な点が生じているか確認後、自宅訪問している。近隣トラブルに発展した際は、解決支援サービスを行う民間仲介者を紹介した。

（２）印西南部地域包括支援センター（以下、「南部」。）

①課 題：独居。認知症低下により生活に支障をきたしているが、協力できる親族はいない。

対応方法：介護申請をして支援開始。唯一の友人の協力を得ながら、成年後見申し立てを社会福祉協議会の窓口とともに支援した。

②課 題：認知症の高齢者と配偶者で生活。生活が困難となっているが支援が入らない。体調悪化により救急搬送数回あり。

対応方法：NPO の見守り支援機関と連携し対応。お子さんへ連絡を取り、施設入所を支援した。

③課 題：独居。認知症の被害妄想、興奮、暴言が続いていた。専門医でも症状コントロールが困難。家族の精神的ストレスが増大。

対応方法：家族の相談に何度も応じながらご家族支援を中心に対応した。

④課 題：独居。近隣の協力が（行き過ぎも）あるが、家族が周囲の支援を迷惑がっている。本人の意思が家族に尊重されていない。

対応方法：ケアマネジャー（以下、「ケアマネ」。）と連携しながら家族や地域の支援者との面談など、繰り返し対応した。

(3) 船穂地域包括支援センター（以下、「船穂」。）

①課 題：本人の病識がなく、家族による受診や介護サービス導入を拒否。

対応方法：初期集中支援チームと連携し、受診、介護サービス導入に繋がった。

②課 題：認知症の本人と精神疾患の家族の二人暮らし。日常生活は送れているが、室内はゴミ屋敷化している。別居の家族と協力し介護申請に至ったがサービス導入（ヘルパー）に強い拒否あり介入できず。家族が利用している精神科訪問看護のみ利用し様子見。

対応方法：精神科訪問看護と連携し、親子ともども見守っている。何かの際にケアマネや地域包括支援センター（以下、「包括」）に連絡をもらえるよう情報共有はしているが、今のところ具体的な支援には至っていない。

(4) 印旛地域包括支援センター（以下、「印旛」。）

①課 題：本人の病識がなく(妄想、潔癖、不安症)による思い込みの作話が多い。マンション管理事務所、包括、夫が入院している病院、知人へ連日、何十回と電話を掛ける。

対応方法：マンション管理人、自治会長、病院、サービス事業所等と連携をとり、本人からの信頼を得て、ショートステイへ繋がった。

②課 題：夫と二人暮らしで夫が家事全般を行っていた。本人は病識がなく、自分の名前や娘のことが判らない。夫が癌で入院してしまい、娘たちも遠方に住んでいるため生活が成り立たなくなってしまった。

対応方法：娘、医療機関、ショートステイ施設、グループホーム等と繰り返し連携しながら対応し、グループホーム入所へ繋がった。

(5) 本埜地域包括支援センター（以下、「本埜」。）

①課 題：家族の病識がなく、適切な介護ができなかった。

対応方法：地域ケア会議を開催し、別居している家族にも関わってもらい、サービス調整を見直すことができた。

※ケア会議を開催したのは1回だが、同様の相談、対応をしたケースが2～3件あった。

②課 題：認知症で家族が対応に苦慮しているので、デイサービス等の利用をしたいが拒否が強いとの相談。

対応方法：通うことに慣れていただくためにオレンジカフェの参加を提案し、継続した参加に繋がっている。本人の様子を見ながらデイサービスに移行していく予定。

2、認知症に関する取り組み

(1) 認知症サポーター養成講座 <令和6年度 小学校：17校 1,131名 / 市民：134名 / 企業：11名 / 市職員：59名>

(各圏域で開催)

<令和6年12月末現在(過去の開催含む)>

	北部	南部	船穂	印旛	本埜
依頼元	①永治プラザ	①企業 ②社協北支部 2回 ③高齢者クラブ ④中学校 ⑤金融機関 3回 ⑥大学 2回 ⑦民生 南地区	①船穂・そうふけ地区民生委員児童委員協議会 ②アバンドーネ自主防災会 ③自治会(アベックス、レイディアントシティ) ④船穂コミュニティセンター事務局 ⑤高齢者クラブ(みずき会、西の原悠遊クラブ) ⑥ちょきん運動(ドアシティの会) ⑦ディアランドシニアクラブ	①よしきり軽費老人ホーム ②萩原自治会 ③印旛地区民生委員	①薬局 ②あおぞら会
経緯	職員向けに認サポ養成を実施してもらいたいと依頼を受け、開催した。	①②④⑤⑦依頼を受けて開催 ③⑥呼びかけにより開催	地域ケア推進会議の中で地域課題として、認知症サポーター養成講座や見守り声掛け訓練の実施を呼びかけ、開催した。 (うち2団体は今年度)	①依頼を受けて開催 ②③呼びかけにより開催	認知症サポーター養成講座開催の案内をしたところ依頼があり開催した。

反応	認サポの養成講座を受けてもらったが、<u>講座だけでは現場での実践方法をイメージできなかった。</u> そのため<u>実践編として声掛け訓練を体験できたのはよかった。</u>	①あまり関心がない、関係のないこと、という様子 ②勉強になった ③自分のこととして勉強になった ④関心のある姿勢だった。<u>保護者の反応が良かった</u> ⑤<u>若年性認知症については身近に感じた。親のこととして参考になった。</u> ⑥グループワークではとても活発な意見交換がなされた。 ⑦参考になった	認知症についての理解が深まる、見守る気持ちを持つ、<u>日頃からの近所付き合いが大切等</u>の感想が聞かれている。	①<u>活発な意見があった。</u> ②あまり関心がない様子。 ③<u>意識が変わった</u>とのご意見があった。	認知症についての医学的な知識はあるが、<u>実際の対応について学んだことがなかった</u>ので参考になった等の感想があった。
課題	認サポの養成講座だけでは座学で終わってしまう。 そのため実践訓練を想定した<u>ロールプレイ形式の声掛け訓練などの体験講座の必要性</u>を感じる。	・「認知症を知る」ことには成果はあるが、<u>見守るには成果は出ていないのではないか。</u> ・<u>受講後の行動変化など</u>知りたい。 ・<u>サポーターとして活躍できる場につなぐ</u>という動きもあっていけないだろうか。	講座や訓練は、センターから「実施してみませんか？」とお願いをすることで実施に至ることが多く、<u>積極的に地域の方から「実施したい」という依頼は少ない。</u>	・<u>地域の方から積極的な依頼が少ない。</u> ・<u>周知方法について課題を感じている。</u> ・認知症について『痴呆』『ボケ』という言葉が聞かれることもまだまだ多く、理解を深めていく必要性を感じる。	ロバ隊長のマスコットと一緒に認知症サポーター養成講座の開催の<u>周知をしている（今年度は180個配布）が、開催の依頼につながっていない。</u>

(2) オレンジカフェ（認知症カフェ） 〈各圏域、年度内に6回開催〉

〈令和6年12月末現在〉

	北部	南部	船穂	印旛	本埜
内容	- 講師を招いてミニ講座後、お茶を飲みながら交流の時間を設けた。 10月はアルツハイマーイベントと合同開催した。開催時間内出入り自由の形式でカフェを開催した。	- 認知症に関連した話をする - 講師を招きミニ講座やレクを行うこともある。 - 参加者同士の歓談を優先している。 - 参加者同士で主体的に取り組みを持つ機会として「体操」づくりにチャレンジ。 - アンケート内容を反映。	- 講師を招いてのミニ講座とお茶を飲みながらの交流。 - ギターやフルート等の音楽。	- 脳トレ - フランスベッド - 保健センターによるフレイル説明	- 認知症ミニ講座（毎回） - オカリナ演奏、手工芸、薬剤師によるお薬の話、手工芸、コグニサイズ - お茶とケーキでカフェタイム
参加人数	14名 ～ 38名	17名 ～ 21名	12名 ～ 24名	9名 ～ 20名	18名 ～ 35名
当日の様子	講座や参加者同士の交流を楽しまれ、<u>参加者の多くに笑顔が見られた。</u>	- 顔馴染み同士はすぐに楽しい時間を持たれる。 <u>新しく参加される方の受け入れも良い。</u> <u>お孫さんも来ることもあり多世代交流となっている。</u>	<u>当事者やご家族も他の方と一緒に席で楽しめる。</u> <u>音楽の時間は毎回好評で、一緒に歌ったり笑顔が見られている。</u>	皆さんリラックスして交流も深められ、<u>友人を作ることができた。</u>また来たいという声をいただいている。	<u>サービス拒否の強い当事者が毎回家族と参加。ご家族も安心され、相談の頻度が減った。</u> - 家族の認知症の症状や施設のことについて相談があった。 <u>MSP（物忘れプログラム）に興味があり受けた方が数名いた。</u>
課題	- さまざまな場所でカフェを開催したいが、<u>駐車場や交通の便、飲食等の問題をクリアできる場所となると、限定されてしまう。</u> <u>当事者や家族の参加率がまだまだ低い。</u> <u>当事者は、前日に声掛けしても忘れて、当日キャンセルとなることが多い。</u>	- すべての人のニーズに合う内容にはならない。<u>認知症に関する知識を強く求めている人もいる。</u> <u>家族が参加したくても当事者と一緒にはなかなか難しいことや当事者自身が一人では来られないこと。</u> <u>当事者がカフェで落ち着いて過ごせないことで家族も十分に話す時間を持ってない。</u>	- コロナ後、感染対策として主な内容を講座と音楽にしてから、<u>参加者同士の交流時間が短くなっている。</u> - 色々な地区の方が参加しやすいよう4か所で開催しているが、<u>旧地区の参加者が少ない。一方ふれあい文化館は、定員オーバーしている。</u> <u>公共施設が2か所あるが、自力で参加するためには、バス便が悪く、駐車場も少ない。</u>	<u>当事者や家族の参加がない。（家族が参加することに対して負担を感じていると思われる。）</u> <u>集まりのない地区での周知の仕方が課題。（周知や開催に繋がる核となる人物がいない）</u> - 発掘が出来ていない地区のネットワーク不足。	<u>移動の手段がなく、参加したくてもできない方が目立った。</u> - 同じ会場で開催しているせいもあるが、いつも集まりに参加されているような方しか参加されていない。

(3) その他の取り組み

①出前講座

市：4回（延べ受講人数：65名） 南部：（今年度2回開催予定） 本埜：3回 〈令和6年12月末現在〉

②アルツハイマーデーイベント（日本医科大認知症疾患医療センター主催）

開催日：10月5日（土）／会場：文化ホール

参加人数：講演 118名、オレンジカフェ 38名、クラフトコーナー 8名、VR体験 20名、物忘れプログラム 12名

③認知症メモリーウォーク in いんざい

開催日：11月10日（日）／会場：牧の原モア／参加人数：49名

④認知症ケアパス

1,200部作成。本人用ケアパス試用。

（北部）・歌声サロンに通いたいと認知症の当事者から相談を受け、地域住民と共同で歌声サロンを設立してから月2回、定期開催している。

（南部）・月2回開催の「にじいろ」は認知症当事者が通える温かな場になっている。ボランティアさんが更に主体的になってくれると良い。

・働く人向けの申込制の認知症サポーター養成講座を初めて企画（1/28）したが申し込みなし。しかし周知のために民間企業を回ることは啓発活動となったと思われる。

・毎日の散歩を日課としているが道に迷ってしまう認知症の方に、散歩の付き添いボランティアをつけられたのは大変良かった。

・包括が認知症当事者が安心して立ち寄れる場所として存在でき、長期支援できたケースがあった。

（船穂）・令和6年度は、見守り声掛け訓練を1団体行った。（講座だけでなく訓練も、地域ケア推進会議や民生委員定例会等の場で包括から周知するだけでは、実施には至ることは少ない。個別（団体）に声を掛けることで実施に繋がっているのが現状である。）

・初期集中支援チームや訪問診療が増え、医療を受診し介護認定を受けられるようになるケースは増えた。その後、実際に介護サービス導入時に拒否になり支援が止まってしまうケースがある。（②の事例のようなケース）

（印旛）・自治会のラジオ体操（認知症の方も昨年まで皆勤賞で参加）に職員が週1回ほど参加し、参加者の体調など確認している。もの忘れなど個別に相談があった際は、受診の促しなど行っていく。

（本埜）・チームオレンジと協働して認知症サポーターのマスコットであるロバ隊長を作成し、ロバ隊長と一緒に認知症サポーター養成講座の開催の周知チラシを袋に入れて、認知症のイベントで配布をしたり、窓口で自由にお持ちいただけるように設置している。

・平成30年に開催したオレンジカフェ「もとのしあわせ農園」を、翌年からオレンジカフェの実施方法を変更したため、印西市社会福祉協議会本埜支部の事業として現在も毎月第1日曜日に開催し、認知症の方と地域の方との交流の機会をもっている。

・地域ケア会議から立ち上がった本埜支部社協の買い物支援バスは、認知症の方含め利用者1人1人にスタッフ（ボランティアも含む）が付き添っており、包括職員も同席している。